

留のうち、茶の湯に用うる紫のふくさを、此湯にひたしてこゝろみしに、いさゝかも色のかはる事なきゆゑ、里言の虚ならざるを信ず、湯は玲瓏たる事水晶のごとく、大便つうせざる人一碗を喫すれば、こゝろよく通ずといふ。

湯潮ゆのわき

湯の潮わこと、晝夜に三度、長の時に奏潮ハツツ、年中時を違ふ事なし、四十日又は五十日目に終日沸潮、是を長沸といふ、次の日はかならず湧事なし、是を休と云、その次の日湧事時をさだめず、一二日をへてわく事前の如く、湯の沸形勢は、鼎に水を煮るがごとく、はじめは蟹の眼のごとくに湧いで、次第にわきたち、沸湯にいたりては、石龍熱湯を吐がごとく、二間餘もへだてたる大石へ熱湯吐かけるありさま、響は雷のごとく、湯氣は雲のごとく、天に上昇、見るに身の毛もよだつばかり也、此湯を四方の客舎に引き、湯船にたくはへ、冷して浴せしむ、ゆゑに里言に大湯と唱ふ、その圖を下にあらはす、○圖諸國に温泉多といへども、かゝるためしをきかず、天工の機關奇妙、不思議の靈湯なり、唐土雞籠山の潮泉に類すれども、それよりは奇とすべし。

〔漫游文章〕四草津湯泉游記

余游草津、携香太冲所著藥選一本、來以取、則於此、得益固多、雖然在門墻、則塵豈無其辨乎、蓋古人之於湯泉游也、余嘗讀水經、酈注、不言温泉治疾、亦不如此、際多温泉也、上世我民淳樸、山野固乏湯液之治、於是百病一浴、載疾山谷、余嘗入蝦夷之地、而想上世光景耳、蓋毛之野、可浴者數十所、夏月游浴草津、日數百人、何盛、亦惟僻、亦惟笨、其謂之古遺耶、若輦下兩都、與通邑、大城、豈舍湯液、面求治山谷哉、其浴治者、托之以游耳、近時平安一醫、有後藤生、巧思施治、遽發一識於直情、首唱浴治奇驗、其名高于一時、太冲受業其門、張皇一家之說、著書建言、其說謂、但馬城崎温泉、爲海內第一、其地去都下不甚遠、且巴人多、和碌々、就人從此、城崎常爲疾之藪、假使其說之是、東與北垂之多湯泉、渠豈咸履而試乎、夏虫